MEMORANDUM

CONTENTS

MEMORANDUM
大きい大きい石版のお話
乱打するイメージ
二面矛盾
興味の移行のお話
或る人
ボリュームが大きいひとりごと

MEMORANDUM

MEMORANDUM（メモランダム）

❶メモ　忘れないための手控え，簡単に書きつけた手紙・報告など；memo と略す．

❷（外交上の）覚書．

（THE NEW CROWN ENGLISH-JAPAN DICTIONARY p812）

散文的なドローイング、或いは落書き（覚え書き）を続けている。
その覚え書きが、いつの日か“額装”される日を夢見ていたりする。

2018年　ある美術館にて、ある作家のメモ（エスキース）が重厚に額装され、
調光が保たれた環境でお行儀よく観客を待っている姿に出会った。
いつからか、自身が書き溜めているそれらが美術館で保護される日が来たらどうだろう。
と、想像するようになった。

その時、大衆から見逃される存在がスポットライトを浴びる日となるのだろう。

理性によるいかなる制禦もなく、美学上ないしは道徳上のいかなる先入主からもはなれた、思考の書き取り(ディクテ)。

パトリック・ワルドベルグ著 / 巖谷國史訳 1969 年『シュルレアリスム』p20 株式会社美術出版社

大きな大きな石版のお話
（アーカイブとしての工程、所感）

1798年、アロイス・ゼネフェルダーが発見した印刷技法“リトグラフ”（平版印刷）。
石灰石の表面に油成分が多い描画剤を用いてイメージを描き、水と油の反発作用を利用した印刷技法である。
描いた線の表情をそのまま印刷に起こせることが特徴であるため、
有機体のように動く自身のドローイングの線と相性は悪くないのではと考えた。

縦60cm　横81cm　高さ9cm
の石灰石に線を描く
制作方法としては、リトグラフの一連の流れを繰り返す。
前の描画を完全に消さずに。
石版画の再生方法として、石の表面を金剛砂を用いて研磨する。
その際に研磨度合いを調整し、自身が先に描いたイメージを少し残したまま新たな描画を始める。
この行為を数度繰り返す。
以上のことで、一つの画面と向き合うことが難しくとも一つのマテリアルと長期間対峙することは叶ったのではないだろうか。
イメージの繋がりは伝言ゲームの様にも思える。先に描いたものの意味が次の版では何者でもなくなってしまうことだってあり得る。
乱打されていく版画、印刷された作品が卓上に散らばっている時、
版面のイメージ・刷られたイメージは過去となり、
石の厚さは未来となる。となると、現在の所在は何処だろう。
という言葉を版画研究室のインストラクターの方からいただいた。

—
（6月に書いたメモを記載）
時間は逆行しないが、一方向にしか進まないわけではない。という仮定。
過去には戻れないという理由は何？
細胞が劣化することと、時間の経過は同じものだが速さは万物に共通ではない。
過去には戻れない。

有機物は不可逆だが、データではそれが可能になる。
時間が進むことは、一種の救いなのだろう。
風化していくこと、それは細胞の劣化。
時間は存在しない。
細胞の劣化に、時間と名付けただけなのだ。
細胞は存在する。分子は存在する。
それらは運動を続け、消化する。
それらが時間と名付けられただけなのだ。
過去は、今より少し若かった刻だ。2023/6/28

—

2023/11/24 Fri
カウンターエッチに失敗する。

粒子が飛んでいるなあと、見ていたら
なんだか様子がおかしい。
みるみるうちに一昨日描いた線たち/イメージたちが消えていく。
不思議と焦りは無かった。目の前の事象をただ受け入れることしか出来なかった。
己の未熟さにぴったりな失敗の仕方をしていて、納得せざるを得なかった。
頷くまでした。

作品として鑑賞する場合、そこまで大きなものでは無いが
版の大きさを理解している側からするとあまりにも大きい。
石に食われてしまう。そんなことが常によぎるほどである。

石という支持体が持つ迫力に負けてもいい。
寧ろ勝てるなんて考えていない。

何故、リトグラフを選んで1年間続けたのですか？
石見てたら時間忘れてただけです。
あっという間の1年でした。

拘っている理由は？
唯一無二の支持体だからです。
同じ形は二つと無いけれど、限りはあるが同じ形から全く別のイメージを擦り続けられるところ。
先人が描いたイメージを、石の細胞は覚えており、ゴーストとして再び出てくる可能性があるということ。
なんてオカルティックな状況でしょうか。
そこに心を奪われたんです。

うまくいかないことの方が多いです。
描画も製版も刷りも
不器用な自分が、それでも諦めの　あ　の字も出てこなかった理由は、
ごく稀に、とんでもなくカッコイイイメージが紙に浮かび上がるから。
そして、アラビアゴムをゴクゴク吸い込んだ石が少し茶けて、
私が描いたはずの線が描画時より物凄く艶っぽく重厚なイメージになるから。

先日、石の上に片足を少しのせて描画をしている時、
今まで経験がないほど愛おしい心持ちで相手の表皮に触れている気持ちになった。

乱打するイメージ

自身の創作する行為に名前をつけてみる
（強迫観念からくる制作の蓄積、乱打、一つの作品と長期間向き合わず多方面に作り続ける姿勢・一連の行為）

作品の強度は、何が担保するのだろう？
その問いに17歳の頃の私は「量」としか答えられず、
愚直に6年間、ドローイングという名の筋トレをしてきた。
それは、強迫観念に通じるものがあり、生命維持の要素にまでなり得た。

制作する者は、何に縛られているのか。
必ずしも作ったものたちに理由や目的は必要なのだろうか。
何を描いているのか？と問われた時、
自他共に頷ける答えを即答することが難しい現状。自身の行為に名を授け、カテゴライズしたい気持ちはある。
が、しかし、
ある日は、夢で見た風景を。
またある日は、電車に揺られている時に思いついた詩を。
昨晩は、愛する人を。
その数時間後には争いへ思考を飛ばし、言葉を綴り始め、
そうかと思えば、散文を映像化させてみたりする。
明日は、目の前に山積みの服をスケッチする　のだろう。
果たしてそこに一貫性はあるのだろうか。

湧き上がってくる単語の羅列を、画面の中、心地よい場所に配置する。
生活のどこかで目をかすめていった情景の破片が口をついて出る。
ダバダバとこぼれ落ちていく前に、記憶を書き溜めることに執着が発生する。
人間は、いつその命が満足するかわからない。その為、胃液が出るまでテキストとイメージを吐き出さなければいけない。
それらは日記であり、覚え書きであり、ある日突然に作品と成る。

二面矛盾

両面に印字があるものは作品では無いなんて話を聞いたことがある。
故に印刷物は、作品では無いのだろうか？

世の中に溢れかえる印刷物全てに同等の価値があるなんてことを言ってしまえば、
それは一概であり、暴論なのだが、
となると、その中から作品に昇華していく理由はなんだ？
作った　人（もの、場所、時間）　？
印刷ってものは、要は技術で無機物だ。
印刷物（版画）になると、印刷技術・イメージ・デザイン・大きさ・
作者・配布／掲示場所・時間・社会的背景…etc　込みで印刷物になる。
これになると、もう無機物ではなくなると考えているんだけれど。

しかし、印刷にかければ作品が出来るっていう魔法を知っている。

版画は、作品です。
版画は、作品ではないです。

私が作っているものは、
作品です。

本当に？

私は、街中の一角を模倣し、目にも止められない可能性の方が高い印刷物を模倣し作品として作り、
私は、美術館で厳重に保護され、お金を払って目に焼き付けるように見てもらう作品を印刷物として作る。
それが、同一の人間から生み出されること。

一つの体に共存する、二面性以上の特性を尊重していくためのプロセス。
二項対立を作る前にそれらは常に表裏一体で、又、延長線上のラリーであることを主張したい。

興味の移行の軌跡

興味が次へ移行するまでの時間がものすごく早い。
その為、長い時間をかけて一つの作品を束ねるまでには常に紆余曲折ある。
完結させて移行することもまた難しく、途中で移ろいでしまいがちだ。
MEMORANDUMと称せば、収まりがいいのかもしれない。

修了制作開始当初、街角の掲示板に興味を持っていた私は、
街角に掲示される印刷物と、アカデミアでこしらえてきた
印刷物（高級印刷）の違いは何処にあるのだろうか。と疑問を抱き始めた。
片や、雨風に打たれ溶けていく、片や厳重に保護される。
それらに価値がつく瞬間に嫌味ったらしく興味が湧いた。
だってそれらは、人間社会を丁寧に見せてくれている様だから。

どうして掲示板に興味を持ったんだろう？
　万物に価値があると思うんだ。
八百万の精神ってやつ？
　うん、だと思う。話が飛んでるけど、ここに準ずると思ってる。
　何かが、蔑ろにされることとか、極端に優劣をつけることに
　どうしても順応できなくてね。
綺麗事だって思ったりもする。
　そうだよ。よく考える。その根底には、
　承認欲求があると一旦たどり着いた。
というと
　私は、誰も優劣つけないし、適当な扱いをしないから
　あなた方もしないでね。っていう、エゴの押し付けだな。
　加害者になることへの異常な恐れもあるのかもしれない。
大変正直だね。
　正直に生きていないと、辻褄が合わなくなってくる気がしてる。作品に対しても。
作品を作る時、画面：内層どんな割合で思考を巡らせる？
　５０：５０　１００：１００でもいいかもくらい笑
　理想は５０：５０　内層部分は、ここ最近思考がクリアになってきてから重点を置けるようになってきたよ。
　画面より重んじているかもね、ただどこかに蚊帳の外、ズルいやつを飼ってるから周りくどいメッセージを入れ込んでいる。
　どうなんだろ、気づく人にとっては安直すぎると思われてるかな。わかりやすく伝える勇気が足りないのもある。
まだまだ聞きたいことはいっぱいあるけど、今日はこの辺で、ありがとう。
　いいえ、こちらこそありがとう。また。
また。

物体には必ず、作り手が存在する。
故に掲示板に関しては、特にそれを頭の片隅に置きながら見る様になっていた。
しかし物語は続く。
次の掲示板が現れる前に、私は地面に突如現れた道路工事の指示書きに夢中なのだ。

或る人

版画を専攻して数年経った頃、
メディア（媒体）の話が頭に突き刺さって抜けなくなった。
そして、印刷と、作品のお話も。

大きな印刷会社へ見学に伺ったことがある。
職人たちが繊細なインクの調整を、
豪快な機械の中、騒音の中行っていた。

それでもAさんは、印刷物になった瞬間
それは作品では　ないんですよ。
と言い張った。

Aさん、あなたはとてもカッコイイビジュアルを作り出しているじゃん。
それらは作品じゃないの？Aさんはアーティストじゃないんだ。

またある日、
PERCEIVED OBSTACLES Richard Tuttle リチャード・タトル 作品集を広げながら

Aさん、　このアートブック
後ろに印刷がされていないから破れば、壁に飾ることができるよ。
これは作品という二面性を持っていると思う。

Aさんは、半分にやけた顔で
揚げ足をとるなよー！なんてことを笑いながら言っていた気がする。

それらの経験が、どうにも引っかかっている
Aさんのバックグラウンドを知り尽くしているわけではないから、
どんな心持ちでその場にいたのかすら定かではないし、
どんな切り口で向き合ってくれていたのかすら、今やわからない。

しかし、それらは
この環境にいるものづくりをする者に向けて、作家と錯覚するな　なんて
言っているようにも思えた。

しかし、Aさんはこう続けた

君は作家になれると思う。

私はこの言葉に呪われているようなものだ。と同時に、その一言で指針を定めることとなった。
正直、美術大学に入学し数年、
作家を志したことはその瞬間の前には無かった。

8月末日　Aさんに再会。

このページを開くまで、二ヶ月近く時間が経ってしまった。

8月某日、
2年ぶりにAさんと対話することになっていた。
目覚め、普段よりずっと緊張もしていて、
あの頃の浮ついた気持ちはどこにもなかった。
舐めるなんて態度は存在せず、ただ、ただ
私は制作に、真面目に向き合ったのだなと初めて実感した。
次に会う頃には、どんな話を選択するのだろう。
わたしは、忖度なしに無邪気に話続けられるだろうか。
忘れないように、考えすぎて奥にしまう恐れがあるから、書いておくけれど
「数十年後、大事に大事に保管される紙切れを作る」とAさんと約束した。

これに尽きるんだ。今の私の頭の中は。
ここまで、違和感なく人の言葉を鵜呑みにしていることに驚きもするが、
自身が沸々と抱いていた感情をやっと外界から言語化してもらっただけなのである。

次に何の曲がかかるんだろう。

しかし、こうやって文化は受け継がれていくのではないかと考える。
制作という行為には愛情表現の要素が多分に含まれる。
私が、これから制作を続ける先にも常にどなたかがいるのだろう。
Aさんが印刷物を経て注いでくれた知識の紙面上に私はいるわけで、
大きく広げたワークシートの中央に座って天を仰いでいるのが俯瞰してわかる。
きっと何かを答えても、あの人はあの目で少し口角をあげて、私を律する言葉を
用意する。
そして私は、
いつまでもこのラリーが続くことを望み、思い浮かべでしまうほど全ての単語を拾い集めにいく。

Aさんは、

ボリュームが大きい

ひとりごと

創作意欲
波があるものであるが、波という表現も隠喩になってない。
例えば、司令官がいて　少し上からよく跳ねるボールを落とされる感覚。

その跳ね具合には個体差がある。
上官の気分で落とされるボール。
その上官ってなんだ？

脳　と考えるか
スピリチュアル的な作用　と考えるか。
20231007 17:56

・

制作は、何ものがさせるのか。
芸術という行為に疑問を持つ根底には、
間違いなくそれまでに経た美術教育の純度が関係していると考える。
おそらく、私生活を脅かされている立場の人間は、
美術芸術に陶酔することは極めて難しい。
そんな余裕は正直なところ、あまり無いのだ。
だとしたら、時間にも資産にも精神的にも余裕がある人間のみが美術を楽しむべきだろうか。それ以外の人間には、介入する余地もないだろうか。
否、社会は人々を豊かにするために美術を供給する。
しかし、現実はどうだろう。はじめの問いにまた戻る。

・

新約聖書と旧約聖書を本棚に戻す時、
左が旧約で右に新約を置く様に。

●___
↓

○me_____　地面

・

制作意欲とモチベーション
また、意欲低下と手が止まること

後者
一体どんな条件が揃えば意欲は低下し、手が止まってしまうのか
・他興味が捗っている
・失敗から再トライすることを恐れている
・依存先が変わる
・制作より大切な事象が発生している

上記を踏まえた上で
前者
・再度火がつく
・成功の糸口が見えた
・他依存先が断たれた
・興味周期のタイミング

・

灯油、アセトン、ラッカーを普段より多く吸い込んでいたら
気を抜いたら焦点がズレるところだった。
だからと言って、電光石火の如く描かねばいけないイメージが
ガツンとぶつかって来るわけではない。当たり前。

・

言葉を生み出した悪魔を恨むパラドックス
(I have created languageＯＯと、定規が言っています。)

・

言語化できないイメージを扱ったコミュニケーションのプラクティス

・

(現状、わたしが言葉を描く残す行為は、思念する家庭で浮かんでくる灰汁を救っている感覚。これがまた宝探しの様で面白い。
溜まってきた言葉たちを挿絵とともに綴じたい。実現させようか。)

・

想像した惑星で友達が出来た筈なのに、私の眼はどんどんと悪くなる一方である、
全てが何重にも揺らぎ、逃げ隠れしてしまう。
魂と肉体は、とっくに距離を置いている。
一方はもう、戻ってこないかもしれない。
数百キロ先に置き手紙と留守電を入れた。
親も子のもいない体内のガランドウに青が入る。